

きみとみる
夏の光

キミと見る夏の光

「一緒に見に行かない？」

そんなことを言われたのは初めてだったので、私はひどく間の抜けた声で「なにを？」と問いかけたつもりだった。つもりだった。そうだった——たぶん。あまりに叫びすぎて、喘ぎすぎて、私はすでに声がかすれていたの、それが男に届いたのかどうかはわからない。

だが男はそれを聞いて「花火だよ」とだけ答えた。

花火？

何故そんなものを見に行く必要があるのだ——と思いかけて、体が浮く。熱が背筋を焼く。

花火？

私にはそれに付随する連想が続かない。

花火？

それは何だ、火薬と紙で寄り合わされた爆発物、色の違いは薬品の配合の差異、青の色を出す薬品はなんだったか、確か——。ああ、視界がぶれる。

男は笑いながら私の膝を胸に押し付ける、苦しい

からこの姿勢は嫌だと何度言えば——ああ、視界の隅でぶらぶら揺れているのは私の足首か？

ぐっと腰を進められる。背中が浮く。苦しいが相手を顔を見ることができるとこの体位が君は好きなのだ、いつもこちら側で私を侵す時の君は元気がいい——私はそれを彼の表情でなく、体内で暴れる肉体の一部で感じる。それは私の感じるところを探し、もっとも深く繋がった状態で、ほんの少しだけ奥へ腰を突き入れたときに一層強く思う。いや、感じる——意識が吹っ飛ばすような感覚、目の奥が痺れる、見えなくなる——目を閉じる。後はただ、白く塗りつぶされる世界だけがある。私はそれを君によって、そう君によってもたらされることが気持ちがいいと感じる。君が私の体の中を知り、私の体のスイッチを知り、そうして私の欲望を引きずり出すのを好ましいと感じる——それを自分の体の中で感じるのは、悪くない。

悪くない、と思う。

「何をするつもりなのだ？」

男の生理は吐き出したらおしまい、後はすぐに冷静になる。それは生物としての反応で、つまり生殖が終われば男には用がないからだとも言える。自分の身の危険はそこからもう始まっている。だから醒める。はず、だ——たぶん。

だが私の感じている快楽はそれとは少し違う、もっと深くてもっと長い。それを成歩堂に知れとは思わないう、だが無視されるのは業腹だ。

男はそんなときもやけに手馴れた優しい手つきで私の髪を梳く、背中を撫でる、後始末をする。抜き出した自分の体をぬぐい、その体から吐き出された体液を飲み込めない私の体を探り、狭間に手を伸ばして汚れたそれをぬぐい、ためらいがちに間に指を入れ、緩んだままの粘膜を探り——あまり深くないところまでおそろおそろ指し入れ、可能な限り自分の吐き出した熱を掻き出す。避妊具を用いればこんなことをしなくてもすんだのに、今日はそんな余裕がなかったのか——どうだったか？ 記憶がない。両足を高くあげ、腰を浮かせて揺すり上げられるという、どこか不自然な姿勢で行われた行為でこわ

ばった足の筋を撫でられる。慣れた手つきが過去の誰かとの経験を連想される。それがちりちりと胸を焦がすのもう慣れた。

私は動けない、動かせない——私の感じていた快楽は男とは違うものだ。脳髄が痺れていて、指先が震えている。足の間が数ミリほどずれているような奇妙な感覚。それももう慣れた。

体の、しかも腰のあたりの感覚が戻らないのはいつものことだが、声だけははっきり出すことが出来た。先ほどの質問より酷い声だ。

「何をって？」

「だからキミがさつきそう言った」

「だからそのままの意味だけど」

「どういう意味だ？」

「意味って、そりゃ夏だからだろう」

意味がわからない。

ようやく男は私の質問の意味に気がついたようで、矢継ぎ早にいろいろ質問してきたのだが、やはり私には少し意味がわからないところが多すぎた。

質問の答えの意味もわからずにああ、うん、そう

だ、知らない、知らない、知らない、なぜだ——と返せば、男は大袈裟に嘆いて私の肩を掴んだ。面倒だが身を返すと、男は至近距離から私に謎の宣言をした。

「御剣！ 月末の土日、まるまる全部開けといて！」

それは強制であり、命令だ。

私に命令するとは、いい度胸だな、成歩堂龍一。

どこに連れてこられたのかよくわからない。

その昔、女性は地図が読めないとかいう迷信があったが、残念ながら現在では信じている人などいないだろう。成歩堂龍一は動物のように方向感覚がよく、地図などなくても適当に移動しただけで目的地に達することが出来る、奇妙で奇天烈な感覚の持ち主なのだが、残念ながら私はそうではないらしい。

ドライブは好きなほうだが、それでも車載ナビがなければかなりの確率で道に迷うことが多いほうだ。電車で遠くに行くと、もう方角がわからなくなり、駅の北口だの南口だの言われてもさっぱりわからない

い。迷わないのは、表示や看板や店の名前をはっきり記憶しているというだけにすぎない。

普段使わない駅に連れて行かれ、駅の中のホームの番号と雰囲気をおたおたしている私の手を引いて、成歩堂はどんどん先に進んでいった。時おり気まぐれに店の前で立ち止まり、弁当を買い、飲み物を買、おみやげを買い、お菓子を買った。そんなにいるいろんなものをばらばらに買う意味がわからないといえ、だって全部別の店だし？ と返された。

「よく知ってるな」

「こっちの路線結構使うんだよ。僕の母親の実家があるんだよね。父親のも途中にあるんだ」

「そうなのか」

「あー、どうしようかなあ……普通と通勤快速がこの時間かあ……微妙……うーん、御剣はどっちがいい？」

「……別にどちらでもいい（と）いうか意味がわからない」

「じゃ、ちょっとだけ早いから普通でいいか！」

（なぜ普通のほうが快速より早く着くのだ……？）

手を握られる、そしてホームの奥へ向かう。アナ

ウンスが反響する、なぜかホームの中でハトが歩いている。見上げたら天井に巣があった。「フンが落ちてくることがあるので気をつけて！」との看板、取り私わないのだろうかと思いつつながら電車に乗る。どんどん歩く。長い。長いと思うだけなのか、それにしてもこの電車はホームとの段差がすごい。

開いている席に座って荷物を網棚に乗せたら発車の時刻、まだちらほら開いているほど人はまばら。行き先は都会を背中を背中に郊外へ、路線図だと斜め上へ。時間が中途半端なので軽装の中高年の女性ばかりが目についた。

「飽きたら寝てもいいよ。ボックス席途中で切り離しだから」

「弁当は？」

「〇〇まで入ってから食べようよ」

成歩堂は知らない駅名を答えた。そこで切り離しがあるし、ぐっと人が減るんだよね。前の駅で。

男はみな鉄オタかカーキチしかいないというのは本当かもしれないな。

成歩堂はここぞとばかりに手をつなぐ、人が見えないとなるとすぐに私の手をひく、それこそ子供が迷子になったら困る母親のように必死になって手をつなぐ。私は気がつくとも手を握られている。冬は暖かい成歩堂の手は、夏は逆にさらりと冷たい。

「御剣のほうで冷たいと思うんだけどなあ」

「そうだろうか？」

「冷たくて気持ちいいと思うけど」

「べたべたしてて気持ち悪くないだろうか？」

「そうかなあ？」

まったく惚けている会話だな。

挨拶をした家は成歩堂の親類の家だという。大きな農家を改造した合宿所のような建物、普段は都会の小学生を泊めて農業研修や修学旅行に使うらしい。今はお休みだから貸切、何も出ないけどね、そういつて笑った女性は成歩堂の……ええとなんだったか、母方の伯母だ。車を出してくれたのは従兄で、その家族と途中まで一緒だった。地元では有名な花火大会、このあたりでは一番最後なんだよと笑う。そして一

番大きな花火なんだよとも。そうだな。もう八月もおしまいだ。日が短くなったのがよくわかる。

それにしても川沿いだというのにこの涼しさはなんだろう。さらさらとした風が少しばかりの汗を乾かしてゆく。湿度低いだろ、でも今日の昼間あれでも三十三度あったんだってさ、そんなことを言う成歩堂はすでにシートの上で横になってビールに柿ピー、くつろぎすぎではないか。

川面をわたる風、日暮れて色が変わる見事な雲。空は暗れて、夕方の日は思えない黄色の光が斜めに差し込む。都会の空気とはあきらかに違う。刈り取ったばかりの草の匂い。花火をあげるために河川敷を急遽整備したと思われる急ごしらえの本部。川に沿ってどんなに狭い場所にも公園らしきものがある都会とは大違いのおおらかさだ。

日陰のない河原はまだ熱っぽく、草の生臭い匂いが夏の終わりを思わせる。子供が多いのか、もう泣き声が聞こえてくる。

アナウンスが入った。音が割れている。続けて何かの太鼓の音。それから開始を知らせる花火がいく

つか。成歩堂が、あれはこの地方の習慣なんだよ、と教えてくれた。音がするだけの白い花火を数発、ぼんぼんと鳴る音がする。

音楽。

スピーカーで音が割れる。

そしてまた太鼓の音。

大きくなる、響く、もっと大きくなる——ドンドンドンドンドンドン。

ひゅるっと音がしたと思ったら、頭の上で色が舞った。

「あ」

おおおおおー。

どよめき。感嘆。声が地面に響く。

続けて頭の上で、花が咲いた。

「落ちてくるな」

「近いだろ？ 色と音が一緒」

「皮膚がびりびりする」

「横になるともっとすごいよ」

確かに。

暮れ始めた空が私に向かって落ちてくる。